

シンポジウム「諸宗教の連帯による傷ついた世界への奉仕」

教皇庁生命アカデミーの取り組み：人格主義生命倫理学のグローバル化

秋葉 悦子

1. 教皇庁生命アカデミーは、バチカンに3つある教皇直轄の学術機関の一つであり、1994年にヨハネ・パウロ2世によって設立されました。生命アカデミーの使命は、唯物論的な科学技術万能主義の文化に対抗して、生命の精神的、霊的価値を大切にす「生命の文化」を構築することです。研究拠点は1992年にローマ聖心大学医学部に新たに付設された生命倫理学・医学人文学研究所です。ここで展開されてきた「人格主義生命倫理学」は、伝統的な医学倫理学—後世「医聖」と称された古代ギリシャの医師ヒポクラテスが唱えた「医の倫理」を16世紀以降カトリック医学倫理学が学術体系化し、以後500年にわたってナイチンゲールなど世界中の医療従事者の間で一般的に受け継がれてきたもの—を、今日の国際法とタイアップする形で現代化・理論体系化したものです。

生命アカデミーは現教皇フランシスコの下で2017年に再編され、以後、人格主義生命倫理学を人類社会全体において具体的に実践・応用するための必死の取り組みを続けています。今、私たちが直面しているパンデミックも含めて気候危機による地球と人類の非常事態を引き起こした、人間までも物扱いする「使い捨ての文化」から脱却するために、「生命の文化」を「未来世代の生命の文化」、「人間を取り巻く自然の生命の文化」に拡大し、「人格主義生命倫理学」を地球規模の生命倫理学「グローバル・バイオエシックス」に拡大する必要に迫られているからです。

2. 1960年代に米国で、「ヒポクラテスの倫理は死んだ」をキャッチフレーズに、伝統的な医学倫理学を正面から切り捨てる新しい学問「バイオエシックス」が登場し、日本にも即座に「生命倫理学」という訳語で輸入されました。EU諸国では「米国の生命倫理学」、「個人主義生命倫理学」あるいは「新自由主義生命倫理学」等のように形容詞が付され、伝統的な医学倫理学や人格主義生命倫理学と明確に区別され、以後今日に至るまで両者間で激しい攻防戦が繰り広げられることとなりますが、日本には個人主義生命倫理学が一方的に大量輸入され、個人主義生命倫理学の研究者が生命倫理学者の大半を占める現状にあります。

個人主義生命倫理学と人格主義生命倫理学の最大の相違は、後者が「人格（人間）の尊厳」原則を最高位に据えるのに対して、前者は個人の自己決定や選択の自由の権利を米国憲法の最高の権利である「プライバシー権」の一つとして最高位に据えるところです。個人が選択する内容の道徳性・有害性を問題視して自殺幫助や麻薬を法律で禁止すること

が、個人のプライバシー権の侵害として非難されるようになり、個人主義生命倫理学の登場以降、安楽死の権利、中絶の権利、麻薬自己施用の権利等を勝ち取るために、これらの行為を阻止している法律の改正を求める訴えが声高に主張されるようになりました。

しかし道徳に反する行為、他者や社会に害を及ぼす行為を選択する自由を国内法上最高の権利、すなわち例外のない絶対的な権利として位置づけるとき、何が起こるでしょうか。道徳的な良識をそなえた普通の人々、他者や社会のために尽くす利他的な人々は評価も感謝もされず — というのも、彼らも不道徳な人々、利己的な人々と同様に、単に個人の選択の自由を行使しているに過ぎないのですから —、かえって他者の自由に干渉し、個人の最高の権利であるプライバシー権を侵害するはた迷惑な人物として非難されることとなります。新自由主義は利己主義を助長し、利他主義を抑圧します。今日その弊害は至る所に蔓延しています。

3. 人格主義生命倫理学も「個人の選択の自由」を尊重しますが、選択の内容に関わりなく無制限に認められるものとは考えません。人間が普遍的道徳律の支配下にあることを認めるからです。人間の魂に普遍的道徳律「善をなし悪を避けよ」を刻んだ人間以上の存在（神）を認めるからです。個人の選択の自由は道徳律を超えることができません。人間は自由に道徳律を破ることができますが、良心の呵責、罪の意識にさいなまれることとなります。反対に、道徳律に自由に従うことで、最高善である神に接近することができ、人間としての最高の幸福に接近することができます。自由の真の価値はここにあります。

人間は道徳律を刻まれた魂、「善悪を知る」（創世記 3-22）魂のゆえに、他の動物とは異なる存在価値、すなわち尊厳を持ちます。人間の尊厳原則は人格主義生命倫理学だけでなく戦後の国際法、医学研究倫理の最高原則として、今日の国際社会で一般に通用しています。しかし個人の選択の自由、自己決定権、プライバシー権を最高原則に据える米国憲法理論を最高のものとする法律学者や生命倫理学者は、この原則を受け入れません。

4. 人間の尊厳原則を最高原則とする人格主義は、人間を身体と精神の合一、すなわち物質と非物質の合一として捉え、精神、非物質の次元に尊厳性を認めます。「尊厳死」問題の本質は、生命の精神的次元を無視して、先進医科学技術によって可能な限り物質的生命を延長することに対する異議にありました。新自由主義の陣営では「医師に殺されるプライバシー権」を勝ち取るための議論が当初から繰り返されてきましたが、人格主義の陣営では殺人を禁じる普遍的道徳律を切り捨てることを斥ける一方で、技術的・生物医学的に可能だからという理由だけで執拗に延命措置を続けるべきではなく、医師の殺害を求めほどの患者の苦しみを除去・軽減するための包括的緩和ケア — 肉体だけでなく精神的

をそなえた患者の人間性にかなった、ヒポクラテス以来の全人医療—を提供するための様々な新たな取り組みが医療現場で試行され、近年ドイツやイタリアの国立大学医学部では新たな専門教育課程も開発されました。

人間の尊厳を否定する新自由主義思想は、人間の精神的価値を否定して物質的価値のみで人間を判断する唯物論、また物質的尺度で人間の優劣を判断する優生学に帰結します。人間の尊厳原則が戦後の国際法の最高原則に据えられたのは、優生学に基づいて国家繁栄の重荷になる劣生者—ユダヤ人、精神障害者、有色人種—を物として合法的に切り捨て、実験動物として使用した戦時中の為政者や医学研究者の行為を繰り返さないためであったことを今一度思い起す必要があります。

5. 人格主義生命倫理学をグローバル化する取り組みの最大の障壁は、前述の通り、戦勝国の米国では、そして敗戦後、米国の憲法理論や生命倫理学が一方的に直輸入されるようになった日本でも、同じ敗戦国であるドイツやイタリアとは対照的に、残念ながら人間の尊厳原則が受容されていないことです。どの人間の魂にも道德律が刻まれており、それによって神に接近することができる人間に固有の、他の動物にはない価値を認めなければ、人間は他の動物と同じように、道德法則すなわち精神の法則によってではなく物理法則によって生きることになります。優生学、軍事力、経済力、権力による闘争、弱肉強食の世界が出現することになります。

道德律を備えた人間だけが、物理法則に逆らって弱者（vulnerability：傷つけられやすい者）を保護する義務を自由に担うことができます。富裕層が医療資源を独占する市場原理主義、唯物論経済学にまかせるのではなく、人類全体の利益をおもんばかって医療資源を衡平に分配する方法を新たに考え出す自由があります。グローバル時代の現在、コロナとの戦いは個人レベルでは到底太刀打ちできず、地球レベルで取り組まなければ人類はウイルスに打ち勝つことはできません。人間は自己利益のためではなく、道德律に従って義務を果たす自由があります。信仰者はさらに、同胞愛に基づいて様々な国の人々や組織と連帯し、喜びをもって「人間の共同体」（生命アカデミー設立 25 周年に際して 2019 年に教皇からアカデミーに送られた書簡のタイトル。アカデミーの HP に拙訳が掲載されています）のために、未来世代のために行動する自由があります。新自由主義の信奉者は、それを声を上げることのできない人々や未来世代の人々のプライバシー権の侵害として非難するかもしれません。しかし現在、パンデミックとの戦いにおいて、国連諸機関、世界医師会、医療従事者団体、大学、各国政府、宗教組織、企業、NPO、そして多くの世界市民がそれぞれの役割を果たすために熱心に尽力している現実があります。信仰を持つ人間の共同体の一員として、私もその列に連なりたいと思っています。